

厚生病院だより

広報誌

第64号

2018 4.10

ほほえみ

基本理念

信頼され、心が通う地域医療

基本方針

1. 患者さんの権利を尊重します。
2. 患者さん自身で治療を選べるよう、わかりやすく十分に説明します。
3. 地域の急性期医療を担います。
4. 地域の医療・介護機関と緊密に連携します。
5. 診療の質を高めるため、研鑽・研修に努めます。
6. 医療の安全確保に努めます。
7. 効率的で健全な病院経営を目指します。
8. 職員が誇りを持って働ける病院を目指します。



桐生厚生総合病院

(編集 院外広報編集委員会)

〒376-0024 群馬県桐生市織姫町6番3号
TEL:0277-44-7171(代) FAX:0277-44-7170
URL: <http://www.kosei-hospital.kiryu.gunma.jp/>

桐生厚生 総合病院の草創



産婦人科診療部長 かがみ 鏡 いっせい 一成

桐生厚生総合病院産婦人科に着任して10年を越えました。病院のつくりや仕組みもそこそこ分るようになったつもりですが、まだまだ意外とあいまいなままの部分もたくさんあります。例えば、当院の由来についてです。今回は桐生厚生総合病院草創の歴史を振り返ってみます。

まずは病院ホームページから、1934(昭和9)年、桐生市諏訪町(現東一丁目)881-1番地において、桐生医療購買利用組合立の「桐生組合病院」として病床数20床で発足(診療科4科 医師4名 病床20床)とあります。最初は桐生組合病院という名称だったのですね。ホームページには発足時の診療科は4科とあるだけでその内訳は記されていません。私は産婦人科なので果たして当科が発足時からの診療科なのか少し興味がわきました。

桐生市立図書館で調べるうち、一冊の書物を見つけました。「厚生病院前史」、著者は森正雄氏です。氏の御尊父森宗作氏は、桐生で織物仲買商を営み第四十銀行頭取に就任、桐生倶楽部創設者のひとりです。第四十銀行は変遷を経て現在のみずほ銀行に統合されています。森正雄氏は病院創設の企画段階からの中心人物で、後に初代病院管理者、組合議長に就任されました。戦後になってから本書を執筆されたようで、そこにはこう書かれています。

・・・実際当時の市民が病気(特に重病)の時、如何に困却して居ったかは想像に余りあるものがあつた。医療費に困るばかりでなく、完備した近代的な病院も無く、今日では何でもないと考える病気でも前橋や東京に出かけねば助からないと云う状態だつた。・・・医師招聘(しょうへい)を何とかせねばならぬ・・・

桐生組合病院は、地域の篤志家がこのような高い志をもち、企画されたのでした。しかし実際問題、病院創設をどのように実行したのでしょうか。その鍵となる仕組みが「組合」でした。中心となる予算は少数の資産家、篤志家が捻出し、これを核にして現桐生市みどり市地域の個人宅を訪ね歩いて組合に加入してもらいます。組合費を納入してもらうことによって、病気やケガのときに安い医療費で受診できるようにしようというわけです。

森氏を含め後の桐生タイムス社長木村貞一氏ら11名は「桐生医療購買組合」を立ち上げ、創立者として病院建設に向けて大変奮闘されたのでした。1934年、桐生組合病院としてようやく開業にこぎつけた段階で、内科、小児科、外科、産婦人科の四科四名の医師を確保でき、まもなく耳鼻科が加わりました。創業時の医師は東京方面から派遣された先生方でした。



ところが、間もなく一部の先生が経営陣とトラブルを起こしたことが原因で大半が引上げてしまったのです。困り果てた森氏らは、つてを頼って名古屋大学に問い合わせたところ、派遣の快諾をもらい、安堵したそうです。このことがきっかけとなって、いまでも当院外科の先生方は名古屋出身なのです。桐生組合病院は現在の東一丁目に建設されました。旧桐生女子高校の一区画東に位置し、現在は市営住宅と消防署になっているようです。

当院発行の「桐生厚生病院50年史」に掲載されている写真を転載します。意外にも現代的な外観で、バルコニーなどあってなかなか上等に見えます。立柱にかかれた病院名は、心のこもった力強い筆跡で好感がもてます。背景を含めて周囲がすっきりしているのは、当時は近辺が「草ぼうぼうの畑だった」ので、ほかに建築物がなかったからでしょう。

立派な病院ができたにもかかわらず、経営は楽ではなかったようです。病床が常に不足し、これを増築するためのまとまった資金を調達するのがまた難しく、入院による収益が上げられませんでした。これと関連してか外来受診数も思ったより伸びませんでした。それでも森氏ら経営陣は組合でつくった「我等の病院」の維持のため努力を重ねました。その一環として衛生大展览会(「大」は原文ママです!)を開催、市民にアピールしています。現在の市民公開講座に院内の診療機械や病理標本(!)などの展示を加えたような催しだったようです。そのうちに受診、入院のバランスがとれて増築費用が回収されてくると経営が安定してきました。

当時日本は日華事変、大東亜戦争と戦火の時代に入り、次々と医師が軍に招聘されてしまいますが、病院の発展は続き、1941年にはより規模の大きい群馬県購買販売利用組合連合会の経営となり、病院の名称も「桐生組合病院」から「桐生厚生病院」となりました。「厚生」というと厚生労働省とか厚生年金会館とか、馴染みがあるのに意味を考えた事がなかったのですが、調べてみると「人々の生活を健康で豊かなものにすること」とあります。なるほど、医療の理想を表したとてもいい意味の言葉だったのですね。

戦争が終わると、今度はGHQ統治下でいかに病院を維持していくかの努力が始まります。その過程で1948年、経営母体は一旦桐生地方国民保健組合連合会に移り、さらに1951年、桐生市外十二ヶ町村医療事務組合の所管になりました。「厚生病院前史」はここで終わっています。

本書を手取るまでは漠然と桐生の公立病院程度の認識でしたが、当院はその出自から、市民自身が地域のために「厚生」のスピリットを実現して築き上げた病院だったのです。今日、地域医療は否応ない変化の渦中ですが、森氏らの青雲の志は時代を越えて、現場の業務の端々に光を当ててくれる気がしました。

1960年、当院は創立の地諏訪町から、現在地織姫町に移転します。病床は210床から287床に増えました。名称も承認手続きを経て桐生厚生総合病院となりました。それからのことはまたの機会に記してみたいと思います。

認定看護師の活躍



認知症看護認定看護師

かなざわのりこ
金澤典子

認知症は高齢になるほど発症する危険が高くなると言われています。2025年には65歳以上の5人に1人が認知症と推計されており、認知症看護が必要とされる時代となっています。

当院は県内1の高齢化率の高い市にあり、入院患者さんの68%が65歳以上を占めています。中には認知症に罹患されている患者さんもいます。せん妄症状を認知症と混同する事や、対応に困惑する事も少なくありません。そのような状況の中で、専門的知識やケアの必要性を感じていた時に、認知症看護認定看護師の教育を受ける機会があり、平成29年度に認知症看護認定看護師資格を取得しました。現在当院には3名の認知症看護認定看護師が在籍しています。

認知症の方は入院した状況を覚えている事や、自分の症状などを表現することが苦手です。そのため、混乱を生じる事もあります。認知症看護はこのような患者さんに代わり、症状を正しく捉え患者さんの視点に立ち考える事が大切になります。また、認知症の方は症状が進行してくると、何もできない何もわからないと誤解されてしまうこともあります。残された機能（持てる力）に目を向け、支援して行く事も大切になります。患者さんの視点と持てる力に着目しケアを工夫することで、混乱を緩和し予防する事ができます。

私は現在内科病棟に所属しています。日々の業務に加え認知症の方への対応の仕方や、せん妄予防に向けたケアをスタッフへ伝え一緒に取り組んでいます。認知症看護認定看護師として認知症の方の代弁者となり、安心して治療を受け入院生活を過ごす事ができるよう、支援させていただきたいと思います。

高齢になるほど認知症になる可能性は高く、今や認知症は誰もが関わる可能性のある身近な病気となりました。

私も平成29年度に認知症看護認定看護師を取得しました。

皆さまは認知症と聞くとどのようにイメージしていますか？認知症の方は苦痛などの症状を正しく伝えることや環境の変化に対応することが苦手です。そのため、入院という非日常生活の中で不安や睡眠障害を起こしたり、認知症の症状が悪化したりします。また、認知症と間違われやすいせん妄（意識障害や混乱した状態が一時的になること）を発症し、治療がスムーズに行かないこともあります。

認知症の方には日常の中で声かけや見守りで出来ること、部分的な介助で出来ることなど、患者さんの持てる力・出来ることを見つけていくことが大切です。

私は現在スタッフと一緒に認知症を正しく理解し、出来なくなってしまった排泄や食事などの日常生活が不自由なく行えるようなケア、日中体を動かし夜間眠れるよう生活にメリハリをつけたケア、趣味や日課を取り入れたケアを行い、認知症対応力向上や認知症の方が安心して生活が送れるように取り組んでいます。

認知症看護認定看護師として、認知症の方の思いを代弁することで持てる力を最大限に引き出した支援やご家族を含めたサポートをさせて頂き不安の緩和に努めたいと思います。それが私の使命です。

最後に、認知症の方や家族など地域の皆さまの健康が守れるよう、医師、看護師、理学療法士、薬剤師、ソーシャルワーカーなどの多職種と共に認知症への理解や予防にも努めていきたいと思っています。



認知症看護認定看護師

しみずまみ
清水麻美



桐生市堀マラソン大会への支援



THE 64 TH KIRYU HORI MARATHON

第64回桐生市堀マラソン大会が平成30年2月11日(日)に開催されるにあたり、実行委員会委員長（事務局：桐生市教育委員会）から不慮の事故への迅速な対応など、安全な大会に向けて救急医療体制の充実を図りたいと協力要請がありました。職員に協力を依頼したところ、75人の協力を得られ、医師・看護職員が背部にドクター（ナース）ランナー用ナンバーカードを付けて走りました。また、その他職員も29人が参加しました。



ドクター・ナースランナーの紹介

大会総参加者数 8,795人

当院の参加者

ドクターランナー（医師）	22人
ナースランナー（助産師、看護師）	53人
その他職員	29人



看護師白衣変更

平成30年4月より、
上下白の白衣の上衣が
スクラブの紺色に変更
になりました。

